

【研究ノート】

大和文華館所蔵「秀吉肖像額」について—作品の位置づけと公開—

前号の『美のたより』(No.206、2019年春号)では、「珍稀な秀吉像—大和文華館所蔵「秀吉肖像額」について—」と題し、永年当館では展示に適さないと判断されていた「秀吉肖像額」(図1、以下、本品と略称)について考察しました。繰り返しますが本品の概要を記しますと、材質は木地着色、大きさは縦110.4×横74.0cmあり、画中には「伏見様」「御壽像」「慶長丁酉正月吉日」と記されます。「寿像」とは、像主の生前に制作する肖像のことをいい、「慶長丁酉年」は慶長2年(1597)にあたります。また、扁額の裏には狩野永徳の子である、光信(1561～1608)の花押とされるものが記されています(図2)。

本品の位置づけについて前号では、現存する秀吉像のなかで、本品のような武将の姿は異例であること、画中の「伏見様」という呼称が秀吉を示すのか不明であること、さらに、小袖に描かれた桐紋の葉数が一定せず写し崩れと思われる描写があり(図3)、全体の表現も考慮すると、慶長年間に遡る作例とは見なせないことを指摘しました。本品には、秀吉像であることを強調するために、天正14年(1586)に豊臣姓とともに朝廷より下賜された桐紋が繰り返し描かれますが、「桐紋＝秀吉」という見方が定着するのが、秀吉の二百回忌にあたる寛政9年(1797)に初編が刊行された『絵本

太閤記』以降です。そこから本品の制作時期を幕末から近代、19世紀後半と推測しました。

『美のたより』にて以上のような紹介を行ったところ、本品の制作はもっと新しく、「春峯庵」に関係する作品ではないか、との情報が寄せられました。今から85年前の昭和9年(1934)4月26日、「春峯庵」と号する某大名華族の蔵から写楽の肉筆浮世絵二点が発見されたという新聞記事が出ました。5月12日から14日には写楽の他、岩佐又兵衛や歌麿など17点の売り立てが行われました。ところが、これらの作品は全て贋作であることが発見、5月21日に関係者が摘発されました。すなわち、春峯庵は架空の大名華族だったのです。首謀者の矢田三千男氏(1895～1967)は詐欺幫助罪で起訴され、のち昭和13年(1938)3月に懲役一年、執行猶予のついた判決を受けています。これら一連の出来事が「春峯庵事件」と呼ばれる肉筆浮世絵の贋作事件です。

春峯庵の作品については、『春峯庵華宝集』(1934年)(図4)や『春峯庵什襲浮世絵并其家所藏品展覧入札図録』(川部商会、1934年)という図版目録が作成されています。ただ、何れの目録にも本品は掲載されていません。そこで他の刊行物を調べてみますと、管見の範囲ではありますが、本品について言及された文章が掲載された雑誌や書籍に、

以下のものが挙げられました。

- ①持丸一夫「豊臣秀吉画像と筆者狩野光信に就いて」『美術研究』153、1949年。
- ②『図説日本文化史大系第8巻 安土桃山時代』小学館、1956年。
- ③矢田三千男「真説・春峯庵偽作事件」『芸術新潮』1957年12月号。
- ④矢田三千男「生きている春峯庵—初期肉筆浮世絵への言証」『芸術新潮』1966年6月号。
- ⑤白崎秀雄「春峯庵プロデューサーの死」『芸術新潮』1967年4月号。
- ⑥白崎秀雄「真贋 美と欲望の11章」講談社、1968年。

このうち「春峯庵」との関わりが記述されるのが③④⑤⑥であり、例えば③④には以下のように記されます。

③「太閤秀吉 壽像」なるものが現れた。—これも「春峯庵」である。つまり「春峯庵」は未だ生きているのである」

④「秀吉寿像図(略)はくがこの作品が現在大和文華館に所蔵されていることを知ったのは、前記「日本文化史大系」の挿絵によってであって、いまから七、八年も以前のことである。(略)ほかでもない。これは明らかに春峯庵系作品であった」

また、⑥には白崎秀雄氏が取材の過程で入手した、「春峯庵秘事録」という作品や素材の分析、表現手法についての内部資料を要約したものが記載されています。ここには本品の部分図とともに「この絵のかかれていた絵馬は古いものである。風雨にさらされておぼろげになって

いる画面を塗りつぶすか、ペーパーやすりですり落して、胡粉を下地にしておこへデッサンを描き、余白へ金箔を貼りつける、「春峯庵」の常套的な手法である」とあります。

白崎氏によると、「春峯庵」に代表される贋作の制作は、矢田三千男氏の弟をはじめ数人が関わり、矢田氏自身については「自ら絵を描いた」という証拠は春峯庵のものについてはもちろん、その後の長い生活においても明らかにされたことがない(略)北斎や又兵衛の贋作の、プロデューサーないしデレクターだったのだろう」と指摘しています。

以上のように③④の春峯庵事件当事者の発言と白崎氏の調査によって、本品は19世紀後半ではなく昭和の初め頃に制作されたものと考えざるを得ません。

所蔵作品の公開と展示は作品を理解し、正しい位置づけを行う上で重要です。ただ、展示をする際には、展示会での位置づけを館として来館者に提示しなくてはなりません。そこには所蔵品に対する日々の調査研究が求められます。「知られざる!?大和文華館コレクション展」は、普段展示される機会が少ないながらも学術的に重要な、あるいはその可能性を持った所蔵作品を展示し、コレクションの奥深さを知って頂くことを趣旨としていました。本品はこの趣旨とは異なるものとなったため、今回の展示を見送りました。

前号で紹介したことがきっかけとなり、貴重な情報をお寄せ頂きましたことに感謝申し上げます。

(古川攝一)



図1



図2



図3



図4

季刊 美のたより No.207

令和元年 7月 6日

発行 大和文華館